パフォーマンスとしての音楽授業
－特別支援学校高等部における ICTを活用した演奏支援教材の開発と授業実践を通して－

学籍番号 229202
氏　　名 岩野　牧人
主指導教員 高橋　登
副指導教員 庭山　和貴

１．背景

なぜ学校で音楽を学ぶのか。学習指導要領の目標の文末には「～豊かな情操を培う」とある。この「情操」という言葉は、昭和22年度の学習指導要領(試案)から今日に至るまで70年以上に渡って音楽科の目標に使用されている。しかし「情操」は学術的に厳密に定義されておらず、それが指導の結果として得られるのか、その実態は曖昧で不明瞭であるため、学校現場ではその意味が時代の要請により恣意的に解釈され、音楽が「協調性」「人間性」といった道徳的心情を養うための「手段」として位置付けられてきた。これにより、音楽することそのものに含まれる喜びが矮小化され「音楽は好きだけれど、音楽の授業は苦痛」という子どもたちが生み出されてきたのではないか。本研究ではこれらの問題意識を踏まえ、オルタナティブな音楽科教育として「パフォーマンスとしての音楽授業」の構想を目的とした。その上で、知的障害特別支援学校高等部において、全ての生徒が十全に音楽パフォーマンスできる環境を整えるために、ICTを活用した演奏支援教材の開発と授業実践を行った。

２．文献調査

音楽することそのものを目的と捉える「パフォーマンスとしての音楽授業」の構想に向けて、まず文献調査を行った。ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」をもとにパフォーマンス心理学を理論化したホルツマンは、発達を「今ある自分ではない誰かをパフォーマンスすることで、自分という存在になっていくことである」と定義し、パフォーマンスすることと発達することは不可分であるとした。また、音楽の意味を関係性に求めたスモールは、音楽パフォーマンスそのものが音楽の意味であり、さらには「生きる」ことに結びついた切実な活動であることを示した。

次に「パフォーマンスとしての音楽授業」の実現するためのシンボル・道具について検討した。「五線譜」は、音楽活動を行う上での代表的なシンボル・道具であるが、それを理解し使いこなすことが難しい生徒が多く存在するという意味でエクスクルーシブ性を有している。グッドマンのシンボル論やヴィゴツキー学派の道具論により、シンボルや道具といった人工物は主体と結びついてのみそのものとして成立するということ、また主体同士の関係性を変容させるものであるということが明らかとなった。そこで本研究では、「パフォーマンスとしての音楽授業」を実現するシンボル・道具のひとつとして「ICT」を位置付けた。

３．授業実践

知的障害特別支援学校高等部において、ICTを活用した演奏支援教材を開発し、2つの授業実践を行った。

1つ目は、演奏支援教材とギターを活用した音楽授業である。教材の特徴として、色付き楽譜による押弦・撥弦位置の支援と、画面上をバウンドするボールによる発音タイミングの支援が挙げられる。1曲につき2～3種類(ベース・メロディ・コード)の課題曲を用意したことで、生徒は個々のペースで練習を進め、その成果を合奏で生かすことができるようになった。これは、個別最適な学びと協働的な学びが一体となった音楽授業の1つのモデルを示していると言える。個人練習で自信をつけた生徒は合奏練習でも積極的な取り組みを見せ、生徒一人ひとりが大切な役割を持つパフォーマーとして、協働的な音楽パフォーマンスを創り上げた。

2つ目は、演奏支援教材とトーンチャイムを活用した音楽授業である。ビジュアルプログラミング言語「Scratch」を活用し円形のアニメーション動画を生成した。これをプロジェクタで床面に大きく映し出し、皆で映像を囲むようにして座る。生徒たちは、円の中心から流れてくるノーツが円周のラインに当たったタイミングで担当する音を鳴らすことで、合奏をすることができる。「遊び」の要素を含んだ本実践においては、生徒たちの演奏に関する積極的な意見交換が生み出され、それを踏まえて演奏のやり方を調整するなど、パフォーマーとしての相互作用的な関わりが見られた。

授業実践の前後には、ICTの有用性認識の測定のため、質問紙調査を行った。第1因子「学習の効率化」、第2因子「学びへの積極性」の尺度得点については、実践の前後で有意差は無く、有意傾向が見られるに留まったが、個別の質問項目に着目すると、特に質問1（ICTを使うことで学習内容(演奏のやり方など)が分かりやすくなる）は得点の向上が顕著だった。本実践では、音楽科授業におけるエクスクルーシブ性の解消に重点を置き、生徒の実態を踏まえたICT活用を行ったことが、得点の向上につながったものと考えられる。

４．総合考察

「パフォーマンスとしての音楽授業」は、パフォーマーである生徒たちが多様な特性を持つ他者との協働的な音楽パフォーマンスを通して、今の自分を超えて新しい自分を創り出す発達のプロセスである。本実践を通して、生徒たちは演奏支援教材を使いこなし、他者との関わりにおいて主体的で相互作用的なアプローチを見せた。従来の ICT 理解が補完・補助に焦点を当てる傾向がある中で、本実践では ICT を活用した演奏支援教材が生徒たちの新たなパフォーマンスの可能性を引き出すシンボル・道具として機能したと考えられる。

音楽授業における生徒のパフォーマンス一つひとつに目を向けるとき、例えその授業を通して明確な成果が得られなかったように見えたとしても、決して悲観することなくプロセスそのものを価値付けることができる。なぜ学校で音楽を学ぶのか。それは、協働的な音楽パフォーマンスのプロセスの中で生徒たち自身が発達を創造し、「生きる」という営みを豊かにしていくからではないか。今後の課題としては、学校教育における評価のシステムとパフォーマンスの考え方との整合性について検討していくことが求められる。「パフォーマンスとしての音楽授業」の知見をさらに深めていくことで、音楽することそのものを目的として捉える新たな音楽科教育の可能性を示していきたい。